

3月になり、いよいよ春ですね。3年生の皆さんは12日に卒業式を迎えます。大きく成長できた3年間だったのではないのでしょうか。コロナ禍もあり大変でしたが、未来に光を見つけ、力強く前進してください。「冬の後には春が来る」「明けない夜はない」。卒業生の生き生きとした人生を祈っています。1,2年生の皆さんは、次の学年に向けて、よいスタートが切れるように、着実な準備をしましょう。

## ☆卒業式について

今年の卒業式は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、在校生の参加はありません。参加者は、卒業生とその保護者、教職員、来賓が数名となります。1,2年生は、普通に登校し、9時30分までに完全下校となります。その後、卒業生とその保護者が来校するので、1,2年生の下校時の送迎車による校地内乗り入れは禁止します。卒業生の保護者の中で、車で来校された方は、テニスコート横、校舎前、仁愛大の駐車場(別紙参照)に駐車してください。

## ☆春先は、交通事故に注意！！

積雪や凍結がなくなり、自転車通学生が増えてきました。そこで心配なのが、交通事故です。近年、自転車による交差点での事故が多発しているようです。小さな交差点であっても、必ず一旦停止をして、安全確認をしましょう。勢いあまって飛び出すことがないように！！ヘルメットの着用をすることと並進をしないことは当然です。生徒の皆さん全員が、事故にあわないためのルールとマナーを守り、安全に登下校しましょう。交通安全を心がけるのは、自分自身です！！

## ☆まもなく新年度が始まります！

まもなく4月になり、新年度が始まります。自分を見つめ改善するチャンスです。

1,2年生は、次のことを見直しましょう。

- ① 身なり・姿勢・言葉遣い・生活態度(先輩としての手本)
- ② 生活リズム(夜型になっていませんか?)
- ③ 学習の習慣(成績は学習習慣の影響を強く受けます。)
- ④ 安全意識(校内安全、交通安全)
- ⑤ 社会性(自分と周りの人のどちらも大切にしていますか?)
- ⑥ 人権意識(他の人の人権を侵害していませんか?)

## <人権 NOW>

## ☆大坂なおみ選手！全豪オープンテニス大会優勝！！(裏面に記事)

大坂なおみ選手が全豪(オーストラリア)オープンテニス大会で優勝しました。まさに世界のトッププレーヤーです。しかし、大坂選手はこの活躍により、自身が注目されることで、「人種差別や性差別」への抗議や人権擁護をメッセージとして送り続けています。このことはニュースでも大きく取り上げられ、世界でも社会で起きている問題として意識されてきています。「差別のない世界」を思いながら、スポーツで戦っている大坂選手！とても誇りに思います。

まずは、身近なところから、差別や人権侵害をなくしていきたいですね。

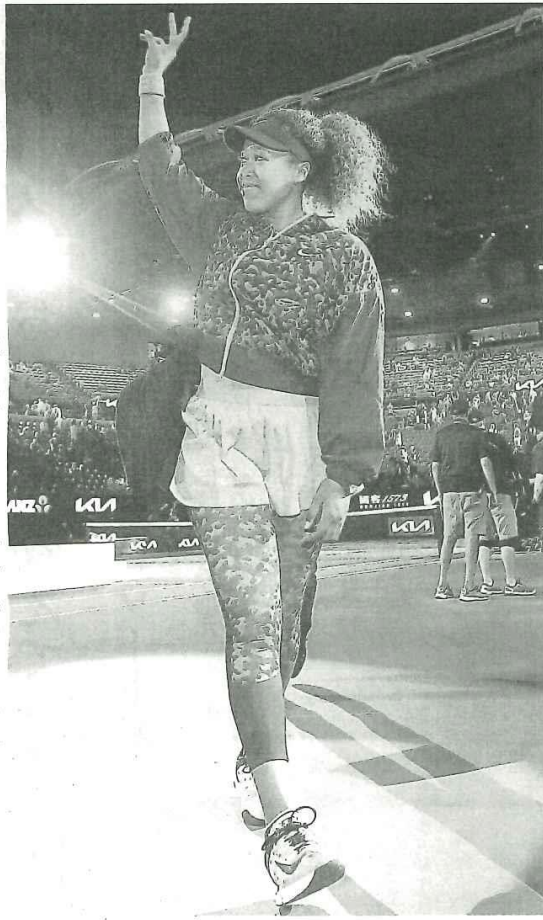
# 大坂 全豪テニスV

## 少数派、女性に寄り添い

新型コロナウイルス禍で先行きが不透明な中、自と同じマイノリティー（人種の少数派）や女性ら社会的弱者に優しいまなざしを向け、力強いプレーで勇気を与える。全豪オープンでシングルス決勝を制した23歳の大坂なおみ（日清食品）はテニス界の枠を超え、今や世界を代表する女性アスリートだ。ジェニファー・ブレイディ（米国）に押される場面もあったが、女王の強さを示し「あなたのお母さんも友人も誇りに思っている」と相手思いやった。

【1面に本記】

手を振りながら引き揚げる大坂なおみ。メルボルン（ゲッティ共同）



ハイチ出身の父、日本人の母を持ち、3歳で移住した米国で始めたテニス。夢を実現するにつれ、使命感が心に宿った。「前は日本人最初の四大大会覇者になり、歴史をつくることがゴールだった。今も全て勝ちたい。でも、優勝トロフィーに名を刻むことより大きなことがある」とコート外にも活動の幅を広げる。

人種差別に抗議し、黒人被害者名が入ったマスクの着用で注目を集めた昨年の全米オープン。「私はアスリートである前に黒人女性」と主張し、その行動に共感の声が広がった。全豪前には「新型コロナウイルスによるアジアのコミュニティへの差別には嫌気がさす」とツイッターで発信した。

男児よりも低い女兒のスポート参加率を上げるプログラムにも協力。1月にはサッカー米女子プロリーグNWSL覇者のカレッジの

共同オーナーに就任し「全ての若い女性アスリートに刺激を与える女性たちへの投資」と意義を強調した。一人の人間として成熟し、試合や記者会見で泣いた姿はもうない。以前なら避けた政治的な質問にも言葉を選びながら対応する。東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長の女性蔑視発言を「少し無知な発言」と語り、橋本聖子会長誕生に「女性にとつ

ての障壁が壊されるのはとてもいいこと」と歓迎した。準決勝で大坂に世代交代を象徴するような完敗を喫した第一人者の39歳、セリナ・ウィリアムズ（米国）は「コートの内外で素晴らしい選手」とたたえた。テニスを最優先に取り組む大坂は自身のことを、仲間の努力を受け止める「器」と表現する。その大きな器には多くの人の夢や希望も詰まっている。

## 弱者の声届ける意志

エッセイスト 小島慶子さん

大坂なおみ選手の全豪オープン2度目の優勝はとてものうれしい。黒人差別への抗議や、東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長による女性蔑視発言への批判など、大坂選手の言動からは、トップアスリートの立場を生かし、弱い立場の人たちの声を届けようとの意志を感じる。

同時に世界レベルのプレーヤー、朗らかな人柄でスポーツの素晴らしさを発信している。スポーツは生きる喜びの表現であり、差別や暴力は生への攻撃。プレーと人権擁護を地続きのものとして自然体で体現する姿は、同調圧力の強い日本で声を上げづらい人にとつ

て、ヒントになるはずだ。もう一つは、英語を母語とする大坂選手が繰り返しメディアに出ることは、「日本語が流ちょうな人だけが日本人ではない」という当然の事実を浸透させてくれる。日本には、日本語の上手な人こそ日本人の思い込みによって排除されている人たちがたくさんいる。だからこそ、大坂選手の活躍はとてもの心強いし、期待している。

こつした姿は、日本に二つの意味で良い影響を与えてくれる。一つは、注目される機会に恵まれた人が、その「特権」をどう用いたらいいか考える際の良いモ

デルになり得る。大坂選手は女性、黒人という個人的な要素と、社会で起きている問題を掛け合わせ「人種差別や性差別にノー」というメッセージを鮮明に力むことなく出した。

「じま・けいこ」1972年生まれ。TBSアナウンサーを経てエッセイスト。